

第 1 回

小坂奇石 作品介绍

平成4年3月3日～4月26日

徳島県立文書館

展示図録目録用

ご挨拶

本県由岐町出身で、現代の日本を代表する書家である小坂奇石先生が、昨年十月六日に九十才で鬼籍に入られました。日本の書道界にとっても、本県にとってもまことに残念なことであります。心から追悼の意を表したいと存じます。

徳島県立文書館では奇石先生の書二十数点を所蔵しております。それは旧徳島県博物館が奇石先生より寄贈を受けて所蔵していた作品を、文化の森に移転する折に本館に移管したものであります。

今回、先生を偲んで作品のうち春にちなんだ書展览展示することに致しました。これからも機会あるごとに紹介していきたいと存じます。

若い人へ

小坂奇石

書はむき出しの若さを嫌う。しかし若い人には若い人らしい息吹きを感じられる作品を書いてほしいと私は思う。それはあくまでも大成への過程として望むものであって、決してそれ自体高度な芸術作品であることではない。

ことばをかえると、書は老成を求める芸術である。長い年月かけて老成を待つのは東洋芸術の特色であろう。若い時から壮年へかけてじっくりと技術と学問の基礎をつくり、人間性の高揚とともにそれを醸成し芸術の華を咲かせるのである。

書の世界では二十代三十代の作品が生涯の傑作であることはまずないだろう。たとえその頃に良い作品が書けたとしてもその人がそれ以後に書いたものの方が、より価値の高いものであることはほぼ間違いない。そこに書のむつかしさがあ、り、またおもしろさもある。

若い人は若さを武器とした作品を書いて欲しい。若い人がいやに老成ぶった作品を書くよりもよい。ひとりよがりの暴走をしない限りそれはそれで将来に良い結果を齎すであろう。しかも本当の腹の底からの力が巧まずして作品に出てくるのはそれ以後であることも心得ておきたい。

そこで若い人は真摯な臨書と、書についての巾の広い学問——私はそれを奨めたい。若さがわき道に暴走しないためにも地道な努力に時間をかけて欲しいと思う。

昭和五十年十月

(『黙語室雑記』より)

此 上の解説注記（一部省略）

左奥より

- 李白「春夜宴桃李宴序」（紙本六曲二隻・二三三、八×三三、〇）
夫天地萬物之逆旅、光陰者 百代之過客。而浮生若夢。為
歡幾何。古人秉燭夜遊、良有 以也。況陽春召我以煙景、大塊
假我以文章。會桃李之芳園、 序天倫之樂事。群季俊秀、
皆為惠連。吾人詠歌、獨慙 康樂。幽賞未已、高談轉清。
開瓊筵以坐華、飛羽觴而 醉月。不有佳作、何伸雅懷。如
詩不成、罰依金谷酒數。

- 小坂奇石「七言絶句」（陶板・二九、五×六三、四）
四山静寂緑陰深 楼在溪風石澗濤
一醉解衣倚欄角 水声濯濯滌塵心

- 進藤虚籟「七言絶句」（陶板・二九、五×六三、四）

- 蘇東坡「東欄梨花」（紙本軸装・一四六、一×四二、三）
梨花淡白柳緑深 柳絮飛時花滿城
惆悵東欄一株雪 人生看得幾清明

右奥より

- 志貴皇子の御製（紙本額装・五九、五×六三、四）
石激垂水之上乃 左和良砒乃 毛要出春尔 成来嶋（『万葉集』）

- 蘇東坡「三邨」（絶句三首）（紙本軸装・一三〇、二×六二、九）
竹籬茅屋趁溪斜 春入山邨處處花 無象太平
還有象 孤煙起處是人家 煙雨濛濛鷓犬聲 有
生何処不安生 但令黃犢無人佩 布穀何勞也
勸耕 老翁七十自腰鎌 慙愧春山筍蕨甜 豈
是膾韶解忘味 迩来三月食無塩

- 「五風十雨」（紙本軸装・一三〇、七×三四、四）
五日に一度風が吹き十日に一度雨が降るのは、氣候順調豊年の兆。

床展示

- 張若虚「春江花月夜」（紙本卷子・三四、四×三七二、七）

小坂先生の略歴

- 明治34年 徳島県由岐町に生る
大正6年 書家黒木栞石先生に師事
昭和4年 漢学者梅見有香、土田江南、増田半剣、長岡参寥
～33年 土屋竹雨各先生に師事
昭和31年 日展審査員
昭和32年 現代書家二十人展、第一回より出品
昭和35年
～41年 奈良教育大学教授
昭和37年 日展評議員
昭和41年 徳島大学講師
昭和42年 書道研究誌「書源」創刊
大阪（府市）芸術賞
昭和45年 高野山大学教授
文部大臣賞（日展作品）
昭和51年 日展参与
由岐町名誉町民
昭和55年 徳島県文化賞
昭和56年 日本芸術院・恩賜賞
紺綬褒章
昭和57年 勳三等瑞宝章
平成3年 奈良県生駒市で死亡、享年90才（10月6日）

本名・光太郎

号・奇石。他に佩韋子、黙語子、同塵子、苦王室
黙語室、南田居などと号した。